

リレー随想

時間が近づいたので講演会場に入り、用意された講師の席に座っていると、同じ宗派の人があいさつにきてくださり、いくらか心強く思ったが、会場の人数が半端じゃない。「なんでこんなにいるんだ…」と知っているのと、後ろの方では席が足りないと言っていて、パイプいすを係の人が、急いで用意していた。講師の席に座り、顔の表情はにこやかにしているつもりだが、自分がこの講演会の中心にいるというのが、どうもピンとこない。

今回の講演の案内をあらためて見てみると、新春講演会および新年会とある。私がお世話になっているセミナーの、天草といっても本渡の方が、その法人会から講演の依頼があったので、引き受けていた。

以前、妹の結婚式で、親族代表のあいさつをしようと前に立って、頭が真っ白になったことがある。今回の講演ではそういうことにならないように、話す

講演旅行 (その2)

土地家屋調査士

田口 一法さん



内容を文章にまとめて、どうしようもない時は、聴衆の顔は一切見ず、ただ元氣よく大きな声で、それを読み上げるだけでもいいと思っていた。

講師として紹介を受け、演台に立って聴衆を見回して、みんな

の顔がよく見える。前みたい
に頭は真っ白になっていない。
「大丈夫だ」と思った瞬間、「こ
こで一体、おれは何をしている
んだ…? おれはただ、土地家
屋調査士の仕事があっただ
けなのに…」そんな思いが、
頭の上からズドンとのしかか
り、途端にひざがカクカクして、
「しまった…、余計なことを考
えた」と後悔したが、もつ遅い。
第一声で、声が上がっているの
が、自分でもわかる。

「話の中身はあるんだ。落ち
着け」と自分に言い聞かせ、こ
の際聴衆の顔は全く見ないで、
原稿を読み上げることだけに専
念しようかとも考えたが、百名
近い人を前にして、聴衆を無視
して原稿の棒読みなど失礼で、
とても出来そうにない。

話の内容を原稿で確認しな
がら、そうこうしているうちに、
どれくらいの時間がたったの
だろう。手元で時計を見たら、
思った以上に時間が過ぎてお
り、残りはおと十五分しかな
かったが、準備してきた原稿は、
半分も終わってはいない、ま
だまだ言わなければならぬ
ことが、随分と残ってしまっ
て…。